
講 演：分科会B

オーストラリアの社会・生活を教えるには — 映像を使つての教授法 —

掘出し物

— 国内向け映画を使ってオーストラリアを教える —

マルコム・アレキサンダー
グリフィス大学

要 約

1980年代のオーストラリア映画産業の復活以来、オーストラリアは地域製作映画の豊かなレパートリーを広げている。*Crocodile Dundee* や *Priscilla* などは、国際市場向けに製作され、その分野で成功を収めた。しかし、地域製作映画のほとんどは、海外には配給されていない。それらの映画は、オーストラリアについて教える教師にとっては、豊かで幅広い情報源である。それらは、オーストラリアの風景や都市、社会様式、社会的問題、世代間および政治的軋轢、そして主に、オーストラリアで使用されている言語ならびにユーモアのセンスを、鮮やかに描き出す。本稿では、海外の学生にオーストラリアについて教えるに当たり、私がどのようにこの種類の映画を選択し、上映し、また使用しているかについての概要を述べる。*Looking for Alibrandi* および *Rabbit-Proof Fence* という非常に有用な二つの映画についてお話しする。また、映画の使用が生み出す問題というトピックスを、いくつか考えてみる。

オーストラリアを教える：いくつかの第一原則

私は、幸いにも海外の学生にのみオーストラリアについて教えている。この状況は、これらの学生達の能力とニーズに合致する課程を私に開発させることとなった。私は、学生がオーストラリアについて何の予備知識もない、そしてオーストラリアの歴史について全くわ

からない状況で、自国を語ることを学んだ。まず最初に、私はこれが非常に難しいことであるとわかった。オーストラリア人学生のために開発されたオーストラリア学課程は、現在の問題および歴史的論点の解釈と意味について討議する。これらの課程は、学生がそのトピックについて容易に情報を入手することが出来、またこの情報を理解するために必要なバックグラウンドをもっていることを前提とする。

海外の学生の個別指導を行うことによって、実際オーストラリア人同士の議論において我々オーストラリア人がどれほど多くの知識を当然と思っているかを痛感する。しかし、私はこれらの学生に深く共感を覚える。私は1970年代にカナダのケベックで博士課程を学んでいたが、その背景における言語およびアイデンティティの問題についての感覚をよく理解できるようになるまで、どれほど長い時間を要したかを覚えている。さらに個人的には、フランス語を学ぼうと試みた時の苛立ちや、人が単純なアイデアを伝えようとしても言葉が出てこず、もがいている時に感じる小さな子供のような感情を思い起こす。(私はその後、ある期間オーストラリア国外に住んでいた際に、この経験をした。)

クラス担任として、私は全く新しいテクニックおよびアプローチを開発しなくてはならなかった。私の通常のやり方では、教えられないのである。これらの学生は、議論の複雑な流れにはついてくることが出来ず、また私が授業に関連づけるためによく使う、ちょっとしたジョーク、挿話、および物語のポイントを拾い出すことも出来ない。さらに、一層多くの視覚の手がかりを使用しなければならない。オーストラリアの都市または町について話をする場合、その名前を書き出し、出来れば地図と写真も必要である。しかし、驚いたことに、これらの学生の多くは、コンピューターのキーボードで作業している時には雄弁なのである。今年、私はウェブサイト・コースにディスカッション・フォーラムを立ち上げたが、このメディアを通じて学生達が行った投稿の数および質を、本当に嬉しく思っている。

私が使用した主な教授法の一つは、オーストラリア映画を利用することである。これらは、オーストラリアの風景および都市を視覚教育的に提供し、また潜在的に我々にオーストラリア人の生活を語ってくれる。その上、映画は、オーストラリア人が彼等自身の考え方や現在の社会問題を論じる手段であることもしばしばである。同様に、テレビのショー番組、ドキュメンタリー、および時事プログラムは、現在の問題についての会話や議論のきっかけを提供する。しかしこれらは束の間のことであり、しばしば1~2週間のうちに忘れ去られる。このため、私は、ほとんどのオーストラリア人が知っている映画のレパトリーを広げ始めた。本論文において、私はこれらの映画の一つについて、およびそれが授業の最初の数週間に教室内でどのように機能したかについて解説する。そして、いかに後半の数週間にそれを利用するかについて提案する。

ふさわしい映画を見つける：“良い”映画以外の、その他の要素

私の目的は、一般的な状況を取り扱い、信憑性のある登場人物が出てくる、オーストラリアを舞台にした映画を見つけることである。概してこれらは、映画としての、またはドラマとしての質において、必ずしも有名ではない低予算映画である。オーストラリアの映画産業は、毎年多くの映画を製作する。政府は、映画金融会社に出資し、税控除の提供によって、映画製作への投資を奨励する。しかし、これらの作品の聴衆は、ほんのささやかな数に過ぎない。大ヒットとなる作品は、まれにあるだけである。ほとんどは、短期間の劇場上映ののち、ビデオまたはDVDで発売される。この一群の中から、私は“掘り出し物”を探し出すのである。

オーストラリアらしさの基準とともに、これらの映画のターゲット市場にも注意を払わなくてはならない。オーストラリア人スポンサーおよびプロデューサーは、メディア・コンシューマの人口学的特徴を非常に明確に把握している。ヤング・アダルト（20代）映画と同様に、ティーン向けの映画は明確なジャンルを持つようになった。大学生くらいの年齢の聴衆には幼すぎる内容の映画を選ばないように注意しなくてはならない。また、語られるストーリーの種類も信憑性のあるものでなくてはならない。ホラー映画は明らかに不適切であり、コメディ映画は信憑性があるように巧妙でなくてはならない。

これらの選択基準は、オーストラリア映画の学術およびメディア評論家の推薦を考慮しても、得られるものはそれほど多くないということを意味している。これらの人々は、芸術として、またはドラマとして、特別に優れた作品を見つけたがっている。映画製作、撮影、編集、特殊効果などの技術的側面も考慮される。このような意味においてしばしば語られる、日本人が登場するオーストラリア映画は、*The Goddess of 1967*である。1967年製のシロエン・ゴッデスを買いにオーストラリアにやって来たカー・コレクターの日本青年が、未開墾地で行方不明になった父親を捜そうとしているオーストラリア女性の旅に巻き込まれていくというストーリーである。これは、撮影技術に優れた秀作ではあるが、今日の普通のオーストラリア人についてはほとんど語っていない。

オーストラリアは、世界的大ヒット作品も生みだしている。最も有名なものが、*Crocodile Dundee*と*Priscilla: Queen of the Desert*である。これらの映画は双方とも、「本物より大きい」キャラクターを撮影し、それらをオーストラリア未開地の風景の超現実主義にあてはめ独特の映像をつくり出すという、オーストラリアの特殊な才能を示している。しかし、これらは普通のオーストラリア人または通常のオーストラリア社会についてのものではない。

私は、授業用にテレビのドキュメンタリー映画も利用してみた。これらはほとんど効果がなかった。これらのドキュメンタリーはオーストラリア人視聴者のために制作されており、

それらが語る場所や人々について視聴者が非常に高いレベルで知識をもっていることを前提としている。多くは、オーストラリア人視聴者によく知られ、名前の字幕がたった一度出るだけの著名人とのインタビューを使用している。外国人学生、さらにアメリカ人でさえ、投げかけられる大量の情報の中で早々に迷子になってしまう。これに対する顕著な例外としては、学校の授業用に制作されたドキュメンタリー教材がある。これらの制作者は、視聴者に予備知識がないことを承知しており、地図、写真、およびその他これらの分野を満たす資料を提供してくれる。(このような資料の主な提供者は、Video Education Australiaである。)私は、オーストラリアの小学校用に提供される教材で、オーストラリアのトピックスについての素晴らしい紹介となるような、ウェブから入手可能なものも、これらの学生向けに見つけている。

DVDの出現のおかげで私の仕事は容易になった。DVDはビデオよりも遙かに優れている。明らかな利点といえば、見たいシーンを容易に見つけられることである。私は、DVDの思いも寄らない利点ももう一つ発見した。オーストラリアで製作されたDVDのほとんど全てが、セリフの英語字幕付きなのである。これらの字幕は、音声をそのまま単純に書き起こしたものである。これは聴覚障害のある人のために提供されたものであり、単に「聴覚障害用字幕」として記載されている。しかしこれらは、外国人学生にとって非常に役立つ。これらの字幕をONにすることにより、非英語圏からのすべての学生にも理解への道筋が開かれる。

どのように役立つのか？ その例

私の授業で最も頻繁に使われる映画は、*Looking for Alibrandi* である。これは2000年に公開され、この映画の脚本を書いたMelina Marchettaの1995年の同名小説を基にしている。監督はTVディレクターであるKate Woodsで、彼女の最初の長編映画を手がけている。

映画の舞台は1990年代後半のシドニーである。主人公Josieはイタリア系の少女で、ニューサウスウェールズ州で12歳の終わりに受ける総合的筆記試験である“High School Certificate”のトラウマを克服していく。(他の州でのシステムは異なる。ニューサウスウェールズ州にのみ学外筆記試験がある。)我々は、冒頭でJosieが片親しかいない子供であることがわかる。彼女は、自分の父親が誰かを知っているが、父親は彼女が生まれる前にシドニーを去っており、彼女の存在を知らない。

Josieは、お金のかかる排他的で「上品な」カトリックの女子校の奨学生である。彼女の学校生活は、階級と民族の差を思い起こさせ、彼女の学校での天敵は、上流階級で北海岸の“プリンセス”である。その父親はトーク・バック・ラジオ・コメンテーターであり、

“Wogs on handouts (移民へのお恵み)”のような話題で、大衆の怒りを喚起する。彼女の親友は、同じ年のイタリア系の少女達で、Josieとともに、イタリア系コミュニティの一員としてのアイデンティティを大事にしているが、何よりもまずオーストラリア人である。

見てわかるように、現代のオーストラリア社会についての多くの問題およびテーマがこのシナリオに凝縮されている。

最初のクラス討論のために、私はこれらのテーマの中から一つを選んだ。映画の主な物語は、Josieの男友達との新たな関係である。多くのオーストラリア人にとって、これは男女別学かつ宗教的学校の窮屈な背景においては起こることである。共学の学校には、異なった十代の世界がある。Josieは、彼女の学校の兄弟校で主席の、自由党上院議員の息子である金髪のJohn Bartonと、純粋な友情関係を築いている。彼女は、Bartonが彼女の夫となり、自由党首相となる一方で、彼女自身も実力で政治的に成功する（労働党の影の司法長官）ことを思い描く。

映画の最初の方で、別の青年が登場する。Cook高校の生徒会長であるJacob Cooteである。物事に無頓着な風貌にも関わらず、Jacobは強力で有無を言わせぬ論客であることがわかる。ストーリーが進むに連れ、JosieのJohnに対する夢は破れ、彼女と本当に対等な潜在的な人生のパートナーとしてJacobが現れるのである。

私は、授業の最初の週にこの映画を見せた。大まかに言えば、学校の規律とは何か、いつ若者は車を運転したり、飲酒したり出来るのかというような、異なった社会において、大人になる過程について話し合うために、この映画を利用した。

それが討論の最初の週だったので、私は電子討論の焦点を、それほどオーストラリア特有でないことにあてた。映画の最初の方で、Josieは、弁論大会で彼女の学校の演説者となる。彼女は、イタリア人の友人とともにその催しに行く。彼等は、彼女の友人の一人であるステディなボーイフレンドとともに車を拾う。この民族グループのジェンダー関係を象徴する、イタリア人の男友達とJosieの友人との短い対話がある。映画は、弁論大会でのJosieの巧みな、しかし型にはまったスピーチの最後に切り替わる。彼女が席に着いた時、John Bartonは形式的なことを言ったのだが、Jacob（映画では、この時点で初めて登場）は身を乗り出し、そして彼の性的経験についてのみだらな例を出して、彼女の困習性を冷笑した。彼は聴衆の中の若者を明らかに惹きつける、手短で、力強く、型にはまらないスピーチをするが、教師や政治家は彼の率直さに驚いていた。

アリブランディをさがして：脚本抜粋

第一場面：迎えの車を待つJosie（右側）と友人

友人：彼、どうしてわからなかったのか理解できないわ。（彼女は、Josieが彼の娘であることを最近になって知ったJosieの父親について話している。）

Josie：多分、アデレードの“寄生虫”（イタリア移民の意）は、ここはどうわき話をしないのよ、

車のクラクションが鳴る。他の女友達のイタリア系ボーイフレンドのスポーツカーが現れる。

Josie：私、あの車では送ってもらわないわ。

金髪の友人・Sara：いいわ、それなら歩きましょう。

次の場面：Josie は車の後部座席に（最初の友人と）居る。Sara は、化粧するためにバックミラーを動かす。

ボーイフレンド：Sara、それじゃどうやって追い越そうとしてる車を確認するんだよ？

金髪の友人・Sara：ちょっと一瞬使っただけよ。

ボーイフレンド（指を立て、お説教口調）：“一瞬”ね。事故をおこすには、それで充分だ。

一瞬でドカーン！ はい、さようなら。

Josie のスピーチへの画面外のナレーション。シーンはオペラハウスのホールへ移る。

Josie：無知は私を守ってくれます。それは、私達みんなを守ってくれます。私がかかを変えられるわけではないのです。戦死することは高潔であると言う人もいます。また、長寿を全うして死ぬなら満足という人もいます。しかし、無知で死ぬのは高潔でも満足でもないと言った人がいますが、そんな人の言うことには聞く耳を持ちません。ですから、それが起きたとき「なぜ私が？」という代わりに、多分我々は「それを防ぐにはなにができるか？」というべきでしょう。それは、私達次第です。ありがとうございました。

拍手と喝采（聴衆のショット。無表情な Josie のライバルの一人）Josie 席に着く。

John Barton（囁きながら）：君は、何も準備してないと言ったと思ったけど。

司会者：次の演説者は……（フェード・アウト）

Jacob（前屈みに）：おい、とりあえず君のスピーチは気に入ったよ。僕はコンドームを使い始める前に、何年もセックスしてたんだ。だから、僕が犯した危険について考えると、くそ恐ろしいんだ。（ここでは皮肉っぽく）君の教えにしたがうよ。そして（コンドームの袋を見せる）これをどうやって装着するのかみんなに見せることにするよ。彼は、演壇に出ていく。無造作に前に寄りかかる。

やあ、元気かい。僕はクック高校の Jacob Coote です。（聴衆の喝采と歓声）

昨日、僕に二つの事が起きました。一つ目は、投票についてのこの全くくだらないものを、初めてポストに受け取ってしまった事です。僕はそれを破って、ゴミ箱に放り込みました。なぜなら政治家連中というものはクズの集まりだと思っているし、彼らの話が恐ろしく退屈だからです。（聴衆からの笑い声。そこにいる政治家は、居心地悪そうに席でもぞもぞする。）

それから二つ目は、僕の父がSBSのドキュメンタリーを見たがったことです。イチジクの葉で交尾する昆虫についての……（聴衆、クスクス笑い）。ですから、僕は“ワールド・ニュース”の最後を見ました。そして僕は、3人の男が撃たれた仲間を引きずっているのを見ました。彼等が、何かについて抗議したので、彼は自国の軍隊に撃たれたのです。

僕が理解したただ一つの事は、男がNick CaveのTシャツを着ていたということです。しかし、その時僕は、どうして僕と同じ年くらいの、僕と同じ音楽の趣味をもった男が、ただ何かを言いたいだけで、自分の政府に殺されなければならないような状況に陥ったのが不思議でした。そして、僕はこの国で、最高の政党を選ぶためでなく……なぜならそのようなものはないので……最悪の政党を追い出すためだけに投票するのだと理解しました。なぜなら、僕がここに立って、我々の首相をぼんくら呼ばわりしても、誰かが僕を殺そうとしたり、皆さんがそれを聞くのをとめようとしたりすることがないというのは、なんとなくいい考えだと思うからです。そして、それが自分に起きるわけがないと信じている無知なまぬけ野郎に世界の反対側から見られながら、僕自身が、ある日のニュースを締めくくりたくはないからです。ありがとうございました。

激しい喝采と口笛

電子討論ボードに、私は次のような質問を設定した。

Jacob は本気なのだろうか？

Jacob (Cook 高校のキャプテン) が、スピーチコンテストのシーンで初めてこの映画に登場する。彼は、いかがわしい言葉を吐き、彼女にコンドームを見せながら Josie を愚弄する。しかし、Josie は腹を立てることもなく、Jacob とまだ話しをしている。

この行動は、いかがなものか？ あなたの国では、これは女の子に対して許される行為であろうか？

クラスの半分以上の学生がこの質問に対し討論に参加した。彼等は皆一致して、この「直接的」で言語的な対峙行動は、彼等がオーストラリア人について気付いたことであると述べた。

映画を使うことにより、彼等は、怒りをかうことを怖れずに、このことを言える機会を得た。「あなたの国では、これは許される行為か？」という質問に対する答えには、国ごとの

ある興味深い問題が含まれる。日本ではこのような行動は年輩の世代には許されるものではないが、日本のティーンエイジャーの間では起こりうることであり、日本の学生は感じていた。アメリカ人は、この種の行動は、彼等の国では許されないが、それを“検閲する”のは正式なものではないと感じた。二人のスウェーデン学生は、この行動は、低年齢のティーンエイジャーの虚勢を示すものであり、ハイ・ティーンには未熟と見なされると感じた。これに関する一連の議論は、数週間続いた。

この映画の一部分は、こうして討論の参考ポイントとなったが、かれら自身の文化についてのコメントを授業で彼等の中で分かち合うことを可能にした。

さらなる話題の紹介

この特別な映画に関する私の説明が示すように、その内側には、オーストラリアの生活および社会の様々な面があるということを示している。この課程が取り扱うべき主たるテーマの一つは、オーストラリアの民族性および多文化性である。映画は、これらの問題について話し合う格好の演壇を提供する。Josie と彼女の仲間達は皆、彼等の両親の文化との繋がりを維持しながら、オーストラリア人として成長し、移民二世のジレンマを生き抜く。一方 Jacob は、労働階級のオーストラリア人の民族的違い、しかしその違いにもかかわらず、それらを受け入れようとする彼等の意欲に対しての、鈍感さを示す。Josie の学校での天敵（「トーク・バック」・ラジオ・コメンテーターの娘）は、民族的違いや不平等を固定化させたがる人々を象徴している。

同様に、この映画は、オーストラリアの階級と不平等についての様々な事柄、そして特に、宗教的違いならびに学校教育がどのようにこれらの差を固定化しているかを語っている。数人のアメリカ人学生が、オーストラリア人が高校生制服にこだわる事実について意見を述べている。彼等は、この文化的重要性について論議することを欲し、またこれが多くの国では真実であると知り驚いている。これらの違いが映画にどのように登場するかを再び討論することは、ディベートの焦点を一般的ケースに合わせる方法である。

一つの映画では社会のすべての側面をカバーできないので、授業では、その他の映画も利用する。アボリジニーの問題に関して、私は『裸足の 1500 マイル』（原題：*Rabbit-Proof Fence*）を使用する（この映画は日本でも入手可能）。さらに、漫画映画“The Castle”を、オーストラリアの労働者階級の生活および「オーストラリア戦士」の非常に重要な文化的神話について話をするために使用する。しかし、提案されるように、商業用映画は一つの視覚的ソースに留め、中学生用に作られたビデオ教材およびウェブサイトでそれらを補っている。学生は、後者のソースからさらに解説や情報を得るが、商業映画は彼等自身の中で、そして教室の外では、彼等と同年代のオーストラリア人との討論において、刺激となる。